

【案内】

李光平写真展 ～植民地朝鮮から「満洲」へ渡った朝鮮人移民～

橋本雄一(東京外国語大学教員)

「私たちの民族の歴史。それを記して後世に知らせなければ、自分は罪を残すことになる。」(李光平氏)

日本の植民地となった朝鮮からやはり植民地「満洲」(中国東北部)へと移動し、かつその「満洲」内でも移動を続けた人びとそして家族たちがいました。現在中国東北部地方に生きる朝鮮族のルーツです。自分たちがよって来た朝鮮という長い時間と地理の独立を主張し活動をするために亡命した者、祖国の経済も植民地化され生活の苦難を余儀なくされ移住した者、そのような近代史の背景から生存と自己実現を求めて外部に自分の道を探した者、……



移民村のご老人を訪ねる李光平氏(右)。
延辺安図県の村にて 2016年夏

自身が中国の朝鮮族である李光平氏は2000年前後から、遙かな道のりを移動した人びとの歴史と現在を記



移民村の歴史の面影を残す家屋。
延辺汪清県の村にて 2016年夏

録して来ました。なかでも、1930年代に朝鮮総督府・「満洲国」・仲介の拓殖会社といった官民の植民地政治によって計画され、「満洲国」内に移動し／移動させられた朝鮮人移民の村が、今も中国吉林省延辺朝鮮族自治州の各所に点在します。その村々を李氏は訪ねまわり、同胞の歴史を語る人びとの表情・生活・記憶そして心をカメラに収め、体験を聞き取る作業を続けています。

村の人びとは「新天地」を宣伝され移住したのですが、そこは実は耕作に向かない厳しい自然の地であり、また抗日闘争を展開する山間部ゲリラ隊に対する防壁として配置される場合も多かったのです。「満洲国」の軍隊や官憲に絶えず監視もされ、移住がそのまま安住ではありませんでした。生活と精神にかかわる新たな苦難の道がその地で始まったのであり、生存のための彷徨は止むことがなかったのです。

来年2019年、高麗博物館さんのご協力を得てこの李光平氏の写真展を催します。開催期間は6月26日から7月7日までの予定です。近代日本によって引かれた植民地朝鮮から植民地「満洲」へと北に向かう一本の道。それをたどった人びとのことを知ることは、アジアと日本の歴史を新たに知り考えることにもなるでしょう。李光平氏による写真とインタビュー証言の数々は、朝鮮の生活と心を保って移動した人びとのことを生き生きと映し、その歴史事実を生々しく語ってくれます。ぜひご覧下さい。

なお現在、李氏の写真を中心にした関連の歴史考察本の出版計画が進行中です。その執筆と監修に当たっている研究者による歴史講座、また李光平氏自身による講演会も、写真展開催中に企画します。

《予告》

李光平写真展「植民地朝鮮から「満洲」へ渡った朝鮮人移民」 & 李光平先生記念講演会・連続歴史講座の開催

期 間：2019 年6月26日(水)～7月7日(日) 高麗博物館

東京外国語大学「李光平写真集」刊行委員会・高麗博物館 共催

日本では、朝鮮植民地支配に端を発して、中国東北(「満洲」・「満洲国」)に移住させられた朝鮮人に関して、ほとんど知られていない。とくに「国策」として荒地に集団移住させられた在満朝鮮人は抗日闘争に対して最前線に立たされるなど、同じルーツをもつ在日朝鮮人とは異なる体験をしてきた。植民地末期には満洲で暮らした朝鮮人は230万人に達し、うち日本敗戦＝植民地解放後も残った130万人が、中華人民共和国成立後は中国朝鮮族の基盤になり現在に至っている。

延辺(龍井市＝詩人尹東柱の故郷)に生まれ現在も暮らす李光平氏は、1990年代末から朝鮮人移民一世を中心に600人もの写真と証言を記録しつづけてきた郷土史家である。優れたカメラマンでもある李氏の写真の数々は、植民地期「満洲」に生きた朝鮮人の記憶と痕跡を深く映し出す。また1919年朝鮮全域でおきた3・1運動は延辺でも3月13日におきたが、李光平氏は龍井市文化会館館長などを務めるかたわら、3・13を記念・継承する活動もしてきた。

3・1運動100周年を迎える2019年に、こうした写真展を開催することで、植民地支配に直面した人々のもう一つの記憶と痕跡を学んでいきたい。

■ 李光平写真展「植民地朝鮮から「満洲」へ渡った朝鮮人移民」

2019年6月26日(水)～7月7日(日)12:00～17:00(月曜日・火曜日お休み) 入館料400円

🎧 李光平先生記念講演会

時期：2019年6月29日(土)14:00～16:30

「〈在満〉朝鮮人の移動と生活を記録する ～延辺地区フォトインタビュー調査20年の経験から」

講 師：李光平(ドキュメンタリー写真家、龍井3.13記念事業会会長)

* 中国文化部群衆文化專業副研究館員も務めています。

通 訳：朴紅蓮(寧波大学教員) 司 会・解説：中野敏男(東京外国語大学名誉教授)

会費：1000円／定員90人

第1回目

🎧 連続歴史講座(全2回)

第2回目

時 期：7月2日(火)13:30～16:00

○「万宝山事件と文学のことは

～「満洲事変」前夜の中国東北・朝鮮・日本～

講 師：橋本雄一(東京外国語大学教員)

○「北間島」の詩人、尹東柱 ～植民地期中国東北・

朝鮮そして日本をたどって読む～

講 師：金雪梅(東京外国語大学大学院生)

会費：800円／各定員50人

時 期：7月6日(土)13:30～16:00

○「満洲」における抗日運動と朝鮮人

～「間島」の1919年3・13独立運動とその後～

講 師：飯倉江里衣(東京外国語大学非常勤教員)

○「植民地から「満洲」への朝鮮人移民史

～「満洲国」期を中心に～(映像上映あり)

講 師：金富子(東京外国語大学教員)

会費：800円／各定員50人

会場はすべて高麗博物館展示室／事前予約あり／来年チラシ配布

(高麗博物館「満洲」の朝鮮人写真展準備チーム)

「ひたむきに生きた朝鮮・韓国の女性たち」函館講演報告

朝鮮女性と連帯する函館の会事務局長 加茂千恵

高麗博物館特別展示「ひたむきに生きた朝鮮・韓国の女性たち」の講演会開催を終えた今、在日女性同盟の皆さんに出会い共に歩んできた30年が、大切な時間を共有し、学び、新しい関係の歴史を作ってきたのだと実感しています。高麗博物館をつくる会宋富子のさんに出会ったのも、出会いと新しい関係の歴史のひとつであり、出来上がった高麗博物館で多くの人々に出会えたことも、今回の企画展・講演会につながり、ここで又新しい出会いを生み出しています。

函館で「道南女性史研究会」や「ウイメンズネット函館」で活躍していた、私たちの仲間「トムの会」東京特派員の大場小夜子さんが高麗博物館に勤務し、朝鮮女性史研究会で活躍していることも本当に不思議な縁を感じています。この講演会の講師が大場小夜子さんと言う事で、彼女に会いたい函館の仲間が台風の影響で雨風強く市内のいろいろなイベントが中止になるような天候にも関わらず大勢駆けつけてくださり、70名の函館市民が講演を聞きました。会場には全淑伊先生のハングル教室の生徒さんが「ひたむきに生きた朝鮮・韓国の女性たち」を思い折ってくださった折り紙のチマチョゴリ人形100体も飾られ、講演会の記念にお持ち帰りいただきました。



10月7日の「アンニョンフェスタ in 函館」風景

次の日のアンニョンフェスタin函館のバザーも、展示を見る人、バザーを楽しむ人、ポジャギやハングル体験教室、チマチョゴリの折り紙コーナーやチマチョゴリを着ての写真撮影等に参加してくださった方々等で賑わい、200名近い市民が参加した30周年記念企画になりました。

私たちは人に出会い、話に耳を傾け聞くこと、行動を共にすることで、多くの事を体験し学んできました。これを語り継ぎ、記録することがいかに大切な事か、今回の展示を見、講演を聞く事で再確認しました。差別と苦難の中で働き生活してきた在日朝鮮・韓国の女性たち。戦争だけではなく男女差別の色濃い生活の場でひたむきに力強く家族を支え生きてきた女性たちは、現在ここ函館で、ともに活動する女性同盟のオモ二たちの中に生きつながっています。トムの輪が途絶えることなく広がり、未来につながりますように。心から願ってこれからの歩みを進めます。

「故郷の春(コヒャンエポム)」

トラヂの会 20周年おめでとうございます♡



まだまだ暑さが厳しい9月8日、私は久しぶりに川崎市桜本にトラヂの会のハルモニたちが演じるマダン劇「故郷の春(コヒャンエポム)」を観に行った。2016年の「トラヂ文化祭」からのマダン劇を少し変え上演。酷暑の夏、週に3回も集まって練習に励んだようだ。

劇は当然トラヂの会のハルモニの原体験をもとに、朝鮮半島の日本の植民地時代～現在のトラヂの会の活動までの踊りも交え、観客に笑いと涙を誘い、感動の拍手で終わった。彼女たちの語りは何ともいえない郷愁がただよい、味のある演技に不覚にも涙した私でした。

どうしても観たいと思っていたマダン劇、たくさんの方に観てほしいし、元気なハルモニたちとも会ってほしい。

(渡辺泰子)



紹介

季刊 戦争責任研究

第90号(2018 夏季号) / 日本の戦争責任資料センター発行

本号は特集を「植民地・軍事支配と性」として植民地による「性侵略」、戦争による「性被害」に焦点を当てている。吉見義明らが中心となって発行を続けてきた同誌は、金学順さんの衝撃的な「日本軍慰安婦だった」とのカミングアウトが大きな発端となったといえよう。そうした意味からも今回の特集は意味が深い。

その内容は樋口雄一の「日本国内の朝鮮料理店と産業慰安所」、神谷丹路の「近代日本漁民の朝鮮出漁と日本人接客業の朝鮮浸透」、菊池保夫「奄美大島の日本軍『慰安婦』」など、充実した内容である。特に、樋口、神谷の両論考は、今まで見逃されがちだった視点から、「性売買」が侵略と戦争に「企図」され「利用」されてきたことの実態に迫っている。

同誌は1993年から25年間刊行してきたが、来号を機に休刊することとなった。こうした地道な研究を掲載してきただけにその休刊が惜まれる。

(梁裕河)



編集後記

▲先日、テレビで「治安維持法」のことを放送していた。治安維持法は初めは共産党を取り締まるものだったが、次第に取り締まり対象が拡大され、国のやり方に疑問をもつ人も逮捕された。「治安維持法」は民主的考えを弾圧する伝家の宝刀になった。さらに驚くのは、日本ではこの法で死刑はなかったが朝鮮では死刑になった人もいたということ。この差は一体！ (S.O)

■徴用工問題の韓国の最高裁判決は「理」と「筋」が通っている、真摯な態度で日本の政府と企業はただちに解決に向けた話し合いに応じてほしいと、切に思う！ (Y.W)